
Stare Melody

大輔(だーすけ)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Star e M e l o d y

【Nコード】

N 7 0 8 2 R

【作者名】

だいすけ
大輔

【あらすじ】

そこそこのお金持ちが集まる、私立白春高校。その生徒会にはある秘密が？ちょっと乱暴で俺様な暇人生徒が、その秘密に巻き込まれて……黒髪で関西弁の美男子を始めとする美男美女の集まる生徒会で何が！？

ドタバタ学園コメディ。 「Smile Japan」参加作品。

第1話：生徒会室（side：nii gaki）

生徒会会長に言われて行つた先の生徒会室に居たのは、疲れた顔で眠っている生徒会会計の人だった。

襟足は軽く結んである艶やかな赤混じりの黒髪に、透き通るような白い肌。窮屈そうに折り畳まれた、細身で長身な身体。赤い小さな唇、そして長い睫毛は、噂になるほどな切れ長の目を隠していて。椎名^{しいなり}棕というこの男、そう言えば同じ生徒会メンバーのオレの幼なじみが好きだと言っていたような。友達も何人が言っていた。頭は良い、ルックスも良い、性格も良し、方言フェチ（女性に多い）にとつては嬉しい関西弁というオプシヨン付き。真面目に見えて、実は面白い上に優しいなんてそんな、とんだ紳士だ。でもオレは、胡散臭いと思った。話したことは無かったが、すれ違つたときの笑顔が胡散臭かつた。そりゃあモテるよ、コイツみたいに作つてたらさ。

「あ、椎名さん寝てはるんですか？」
後ろから入ってきたのは、生徒会書記の葛城^{かつらぎ}友也。唯一の高校一年生メンバーだ。

明るめの茶髪にいくつかのピアス、一見すると不良に見えるが全然違う。かなり礼儀のなっている後輩だ。彼も結構整った顔をしていて、割とときな感じで京都出身らしい。そして椎名を尊敬していて、よく一緒にいる。

「新垣先輩がどんな用事なんですか？」
オレの名前は新垣^{にいがき}隼。何にも属さない、部活にも入らないという超暇人だ。

「生徒会長に言われてな。」

「生徒会長もうすぐで来はると思いますよ。」

彼はにつこり笑うと、椎名を起こしにかかった。

「椎名さん、起きて下さい。後少しだけやってしましましょう。」

「ん、おはよう、友也。俺、どれくらい寝てた？」

「20分だけですよ。」

そっか、と疲れたように笑うと、椎名はこっちを見た。眉間に若干の皺が寄る。

「お客さんが来てたんやな。会長は未だなのか？」

「はい、もう少しで来そうですけど。」

「悪いね、待たせて。」

葛城はさつと立ち上がると、再び笑顔で言った。

「俺、お茶入れてきますわ！」

「ありがとう。」

椎名は柔らかに笑った。

「美味しいんやで、友也の淹れるお茶。日本茶も紅茶も淹れるのが上手いねん。」

「そうなんですか。」

「楽にして待っててな。俺仕事してるけど、何かあったら話しかけてもええし。」

そう言つて椎名はオレに背を向けた。カタカタとキーボードを鳴らす。白くて長い指が、流れるようにキー上を動いた。

その姿を見ていたオレの前に、葛城がお茶を置いた。

「ふふ、新垣さんも見惚れてはりますね？」

爆笑を堪えてるような表情でオレに問いかけた。むっとした声で訂正しておく。

「そんなわけないだろう。」

「そうですか、残念やな。」

なんで、と言おうとしたら、椎名に先を越されてしまった。

「何か知らんけど傷付いたわー」

ケラケラと明るく笑っている。全然傷付いた感じじゃないだろうが。

オレがその明るさに怯んでいると、生徒会室のドアが開いた。

「しーくん！」

「棕ちゃん、ただいま。」

先に嬉しそうな声で入ってきた女の子が、なかもとゆいな中本結奈。オレの幼なじみだ。

長い柔らかな茶髪に、クリクリとした大きい目。小さな所為で保護欲が撥られる。こいつもそこそこモテル。(因みに、この学校での”モテル”は、異性とか同性とか関係無い。共学なのに！確かに男子多いけど！)

結奈の後に入ってきたのは、生徒会会長のきりやましゅう桐山柊。椎名や葛城とはまた違った意味でテンションが高い。でもオレの友達だ。見た目はパツとしないが、話術に長けていて、その魅力は多分椎名に劣らないだろう。一緒に居て笑いが絶えないから、ずっと居たいと思えるくらいだ。

「おかえり、結奈、柊」

「あれ、副会長さんはまだなんですね」

「先生に呼び出されてるよ」

結奈はそう言うと、ソファに座るオレに気付いたようでこっちに来た。

「隼、どしたの？」

「あんたんとこの会長さんに呼ばれたんだよ。で？」
目線を柊まで持っていけば、奴は笑って言った。

「おう、お前を生徒会役員にしたい。つってもポスト空いてないから、結奈と同じ補佐役だけだな」

「何で急に……」

「やるのか、やらないのか？言ってくれないと俺らの企業秘密は言えないんだ」

気付けば、皆の視線がこちらを向いている。うつ、辛い。

「暇だから別に良いけど、何？」

「隼ならやつてくれると思った！早速だけど、実際にやりながら説明するわ。椋ちゃん、今日の依頼は？」

……依頼？

「今日のは……苛められてます、助けて下さい、やって。ウチのクラスの駒沢やんか。」

「最近恋愛と喧嘩や苛めばかりやないですか。」

「仕方ない、やるのが何でも屋”白春レンジャー”^{はくしゅん}だからな。」

……白春レンジャー？

若干頭がパンクしそうになっていると、椎名がふつと笑った。

「新垣が頭パンクしとる。」

「白春レンジャーってのはね、この学校の安全を守る生徒会上層部の機密組織なんだ。云わば何でも屋。噂は聞いたことあるだろ？生徒は正体を知らない。でも、投書箱に依頼を書き入れれば叶えられるっていう。」

「それがあたしたちなの！」

……ごめん、全くついていけない。

「さ、行こうか。呼び出しの時間は？」

「17時半。あと15分や。」

「これはあきませんわ。」

……オレ、もう駄目だわ。

第2話：初めてのおつかい、じゃなくて依頼（side：nii gaki）

完全にパニックだ。何でオレがそんなレンジャーごっこに付き合わされるんだ。

「ほら、ぼーっとしてないで行くよ！」

結奈に引っ張られてオレは泣く泣く生徒会室を出た。

なんともベタな体育館裏。喧嘩に強い椎名とオレが前線、次に強い葛城と柊が後ろで待機している。

（良くバレないよな……）

まだついてきてない頭を、仕方ないからと納得させる。

横を見れば、明らかに楽しんだ様子の椎名。

「なあ、いつ来るん……」

「静かに！」

椎名が指差す先に、駒沢くんとやらと数人の悪そうな男子が。どう考えたってリンチの場面だよこれ。

「んじゃ、行こうか。」

ぼつりと柊ことリーダーが出撃命令を出した。

皆して色の付いたレンジャー仮面（因みに、柊はレッド、副会長はグリーン、葛城はオレンジ、結奈はブルー、オレはパープル）と思いきや、椎名だけ真っ白な狐の仮面。なんで？と思いつつも後回し。

「ぼーっとすんなや、行くで。」

「お、おう。」

狐の仮面に黒髪って似合うな、なんて場違いに思った。ますます胡散臭い。

「や、やめてくださいっ」

駒沢のか細い声が響く。これはターゲットになりやすいタイプだな、なんて呑気に考えながら走っていった。

「なあお前ら、何してんの？」

訛りの無い標準語ってこんなに怖いのか……椎名は薄ら笑いを浮かべて、ついでに声に感情も消して言った。これが、あの関西弁で面白優しいキャラと同一人物だなんて、信じられない。

オレも置いてけぼりを喰らうわけにはいけないので、同じように他の奴を脅した。

「何やってんだよ、離してやれ。」

普段からこんなだけどさ、オレ！

「誰だよ、変な仮面付けちゃってよ。邪魔すんなっ」

いきなり殴りかかってくる下っ端たち。椎名はリーダー格を相手してる。

「名乗る筋合いもない。」

「ホワイト、加勢しましょうか？」

「必要無いな。連れていってくれ」

了解、と葛城ことオレンジが言つて、駒沢を連れ出した。それを横目で見たオレたちは、遠慮なく（？）相手を潰したのだった。

「すみませんでした！」

全員が土下座をして謝り帰っていった後、オレたちは生徒会室に戻ってきた。

「しーくんも隼もお疲れ様。カッコ良かったよ。」

結奈は飲み物を手渡ししてくれた。オレにはちよっと甘めのミルクテ

イー。椎名には微糖のコーヒー。

……なんかオレ餓鬼だな。
ちよつとだけ凹んだ。

「ありがとう。」

椎名と葛城の訛りは元に戻っている。

「椎名も葛城も、なんでさっきは普通に標準語だったんだ？」

「顔隠してるのに、東京で関西弁喋ってたら人物特定されやすいんですわ。せやから、バレへんように標準語にしてるんです。」

「そつか。なんか違和感アリアリだな、それはそれで。」

「かもな。でも新鮮やろ？俺じゃないみたいで。」

……なんか、今腹立った！

その不敵な笑みで言われると腹立つ。凶星なのに。

「嘘や、そんな敵意剥き出しにすんなよ。」

柔らかい余裕の笑み。コイツには適わないと思った。

「はじめの時より、ここに慣れたろ。こんな仕事を実はしてるんだ、俺たちは。」

柊はオレに向かって言った。きつと楽しいんだろう、仕事は大変でも仲間が良い仲間だ。

オレも笑って返した。

「今更やめますなんて言えないんだろう？」

「おう。なら宜しくな。」

口々に宜しくと言われ、少々照れくさく。オレはふいつと横を向いて頷いた。

横目で見た椎名は、葛城と嬉しそうに微笑んでいた。

「あれれ、皆揃ってる。あ、依頼行ってくれた？」

「おお、行ったよ。」

生徒会室のドアが開き、入ってきたのは不在中だった副会長、あいは相原海斗。らかいと

貴公子的ポジションで、紳士。たまにド天然を発動させることも。

背は椎名よりも少し高く、女子にかなり人気だ。

「ありがとう。あれ、しーちゃん怪我してる。」

「へ？ああ、大丈夫。」

驚いたように目を丸めてから、頬を軽く掻く。本当だ、頬にひつき傷。

オレは無意識に顔を歪めていたようだ。パシンと軽く叩かれる。

「なんであんたがそんな顔すんねん。」

「椎名さん、絆創膏ありますよ！」

「さんきゅ、友也。」

椎名に表情を指摘されたのが悔しくて、オレはそっぽを向いた。

……大人気ねえな、オレ。

仲間内でワイワイしているなかに入れないオレに気付いた結奈は、隣に座って言った。

「なんで隼遠慮してるの？らしくない」

オレだって知らないよ、なんか入りがたいんだよ。

「そうだそうだ、隼らしくない！」

終までひょっこりとオレの横から顔を出して言う。何なんだコイツら。

「何なんだと言われれば、白春レンジャーでしょ。貴方の日常を楽ししいものに。」

「それが白春レンジャー！」

……疑問に思ったオレがいけませんでしたすみません。
コイツら、本当に生徒会上層部か？

第3話：恋文専用郵便屋！？（side：nigaki）

初めての依頼から一週間、あれから他の生徒会役員は忙しくしていた。何たって今は春、そう新入生への対応で忙しいのだ。

……なら、レンジャーなんてやらなきゃいいのに。

なんて言ってるわけにはいけないので、オレたちは生徒会室に集まっていた。

「今日の依頼は？」

「直接告白する勇気がないので、手紙を渡して下さい、だって。やるしかないよねえ、しーちゃん？」

相原はひらひらと手紙を揺らした。問いかけられた椎名は頷く。柊もそれに同調した。

「渡す相手のクラスは？」

「1の3、安西。」

相原が読み上げると、葛城が声を上げた。

「ほな、俺が行きましょうか。」

「頼む。で、実はあと二通同じような依頼があるんだ。片方は2の2、新橋。もう片方は3の5、斎藤。」

相原はオレを見ると言った。

「しーちゃんと新垣くんは3年生の方をお願い出来るかな。柊くと結奈ちゃんは2年生を。俺は待って……」

「何でお前は待つねんっ！」

椎名から鋭いツツコミが入る。

ナイス椎名！オレもそれ言いたかった！

「いやあ、二人ずつがいいじゃん？」

「まあ、面倒やしええけども。」

……良いんだ！？

「じゃあ、宜しく。」

「って、何俺に代わって主導権握ってんの？別に振り分けはどうでも良いけど。」

……良いんだ！？（二回目）

椎名がカタリと音を立て、椅子から立ち上がると手紙を受け取った。一つを葛城に渡す。

「友也、渡すだけだからってヘマすんなよ？」

「しませんよ、椎名さんってば変なこと言いはる〜」

くすくすと笑ってから、葛城はその手紙をしまった。

「よく来るのか、こういう依頼。」

「うん、殆どこんなのだよ。」

疑問をぶつけたオレに、隣で寛いでいた結奈が答えた。

「へえ……」

「それがまあ、中身知っちゃった時が大変やねん。」

「相手が自分、なんてこともたまにあるもんな、掠ちゃんは。」

椎名は困ったように笑う。本当に困っているようだ。

「それがしかもおと、」

「ストップ！」

「何で止めるんだよ。」

ぶすつとした柵に、一度溜め息をついた椎名は言った。

「ソッチの気が無い人からしたら、そんな話聞きたくないやろが。変なアピールするなよ。」

……大丈夫、察しはついてる。
だから、何で共学なのにそんな風にモテるんだよ！

「でも彼女居ないよねえ。」

結奈は心なしに嬉しそうに言った。

「俺の話はもう良いってば。」

ワイワイと言い争う数人を横目に、オレは溜め息をついた。

「じゃあ、行つてきます。」

オレは柵にそう声をかけると、椎名と共に3年生の教室に。

「斎藤先輩、いらっしゃいますか？」

「斎藤ー」

「何の用？」

見た目は普通だけどスポーツ出来そう。きっとモテるんだろうなっ
ていう雰囲気の人だった。

「先輩にお届け物です。因みに返品はききません。」

不敵な笑みを浮かべて椎名は言い切ると、「では失礼します」と早
々に立ち去ってしまった。慌ててオレも会釈をして立ち去る。

「お前早すぎ。」

「面倒やもん。」

……言い方が意外に子供だ、新発見。

「ヘマもへったくりもない。」

「依頼は渡すだけやもん。」

口を尖らせて言う彼に違和感を覚えつつも、オレはその場を流して
しまった。

放課後、早めに生徒会室に入るとそこには、集中して何かの書類を書く生徒会会計がいた。

……会計なのにあそこまでする必要あるのかなあ。

「椎名、少し休んだら？」

「ん、これ終わったらそうするわ。」

辛そうな微笑みに再び違和感を覚える。その違和感を確かめるために、（不意打ちで）額に触れてみる。

「熱っ！お前、我慢しすぎだろ！」

一通り怒鳴っていると、見たことの無いくらいしょんぼりした顔が。今までクールな喰えない顔ばかりだったので拍子抜けした。この表情は素らしい。

……なんだ、人間らしいところもあるじゃん。

今まで如何に自分が椎名を胡散臭いと見てきたかが分かる、今のオレの感情。

「ごめん、迷惑かける。」

「いい、そんな言葉いらねえ。」

「ありがとう。」

目を微かに細めて笑うと、ゆっくり目を閉じた。額の上に濡れタオルを乗せてやれば、幾分薄らいだ苦痛の表情。オレはそつとその髪を梳いてみた。柔らかい。

「無駄しやがって。」

「うわわ、どないしはったんですか！？」

入ってきた瞬間大声上げて近寄る葛城を静かにさせる。

「熱あるんだ。休ませてやってくれ。」

そう言うと、申し訳なさそうに目尻を下げる。

「気付かなかった、新垣さんありがとうございます。」

……お前、犬みたいだな。

言いたくなるのを必死に堪えながら「いや」と返事をする。

葛城は突然「よし！」と言うと、簡易キッチン（生徒会室にはこんなものも併設されている。他には小さなシャワー室、仮眠室。）に消えた。

オレは椎名を仮眠室に運ぼうと思って担ぎ上げた。

「軽すぎ、お前。」

背は全然違うのに、ひょいと持ち上げられるような軽さ。本当に食べているのか心配になるほどだ。

「椎名さん、新垣さん、お茶淹れましたよ。椎名さん……無理が祟りましたか。」

「そうみたいだな。そっぴや葛城は依頼遂行したのか？」

「当たり前やないですか！そういう新垣さんたちもやってみたみたいです。」

ああ、と返事すれば、葛城は柔らかく笑って椎名を見た。

「ほんまは、もう一通手紙あったんです。椎名さん宛に。これ渡しておいて下さいね。」

「ラブレター？」

「さあ？でも俺たちは恋文専用郵便屋ですから。」

今はね、と付け加えると、彼は「お大事に」とぼつんと呟き帰っていった。

「大事にされてんだな。」

羨ましいくらいに。

オレの言葉は宙に漂っていた。

第4話：ストーカーという悪から守れ！(side:niiigaki)

暫く椎名は動けなかった。仕事に復帰できたのは発熱から5日後。
「ご迷惑をおかけしました。新垣、看病してくれてありがとうな。」

そう、殆どオレは付きっきりで看病したのだ！勿論結奈や葛城たちも手伝っていたが。

「結奈、手紙おおきに。嬉しかった。友也もありがとな。」

その言葉に何故か照れる二人。そしてそれに気付かない鈍感椎名。

……鈍感椎名って響き良くねえ？

じゃなくって。そう、まだまだ依頼は尽きないのだ。レンジャーは頼りにされてる証拠。

「もう大丈夫なら、ちょっとデカイ依頼やるぞ。」

「何？」

椎名が小首を傾げて柊を見る。

「ストーカー退治。」

「それってヘタしたら……」

「自分たちがストーカーだと思われるかもな。」

現に何度かあったらしい。そりゃあんな仮面付けてたらそうも思われるわな。

「それって校内なん？」

「ああ。犯人の目星は付いてるらしい。ほぼ毎日のラブレターがウザいんだと。」

柊が机に置いたのは、犯人と思われる写真。

「うげ、俺の友達やないですか……」

……何て奴と友達なんだ、今すぐ友達止めて逃げろ！

ってそれも違うだろ。

「最悪やんか友也。」

「ほんまですわ、知らんかった。」

しょぼんとした葛城の肩を叩いて慰める椎名。柊（他の奴も）は何とも言えない表情で葛城を見て、言った。

「変な行動をしたら教えてくれ。あと皆、尻尾掴んで捕まえるまで依頼人と一緒に登下校するように。」

「えー？」

相原は不服感を隠さずに（隠せよ！）言う。

「仕方ないだろー。」

柊の様子だと、彼自身も本当は嫌みたいだ。

「やるしか無いやろ、それが俺たちレンジャーの仕事やもん。」

な？って問いかける先はオレ。オレは渋々頷いた。

さり気なく葛城が友達（藤宮という名前だった）に張り込んでから

二日。オレたちは目撃証言などを集めに走った。

その結果、藤宮の線は濃くなった。何人かがラブレターを机や下駄箱に入れるのを見たらしいのだ。

……机や下駄箱って！ベタ過ぎんだよ！

というのは置いていて。

だからしっかりと張り込んでいたら、隙が無くなったのか大した動きもなく日ばかりが過ぎていった。

「何にもないな。」

ちやつかりオレは椎名の淹れた紅茶と（コイツも紅茶を淹れるのが上手い）、結奈が持ってきたクッキーを食べながら、仕事中の椎名に問い掛けた。（ほらそこ、仕事中的の何とか言わない。）

「泳がせてみる？」

嫌いな笑いを浮かべている。こっちまで背筋が凍りそうだ。

「したら、尻尾出すかな？」

「しなくても、そろそろ痺れを切らして自分から出てきそうやけどな。」

ひょいと椎名もクッキーをつまむ。あ、ココア味美味しそう。

「何か大きな証拠があれば引っ張ってこれるんだけどなあ。」

いつの間に来た相原がクッキーを口に運びながら言った。

……お前は刑事か！っていつかいつ来たよ？

「そうやな、まだへましないんか。意外とやるな。」

……感心してる場合じゃないですよ椎名さん。

「あ、今日の担当俺だった。じゃあお先に。」

「おう、お疲れさん。また明日な。」

「また。」

結局何しに来たのか分からないまま相原は去っていった。再び二人きりに。椎名はまたパソコンに向かっている。

また疲労が溜まって倒れても知らないんだからな、と思って肩を揉んでやる。

……ってドコのツンデレキャラ！？

じゃなくて、まあそういう細かい補佐もオレの仕事だろうと。（普通の仕事は殆ど他の人がやってくれるから）

「サンキューな、新垣。」

「っーか、そろそろ下の名前で呼ばねえ？」

「良いん？」

「ああ。」

一息ついて、椎名は首だけこちらに向けた。

「えーっと、隼？」

「なんでハテナだよ……」

……ワザとか、ワザと保護欲擲るような表情をしているのか！？

「あ、俺は”しい”でええから。あんまり”棕”で呼ばれたくない。」

「わかった、椎。」

ん。とちよつとだけ嬉しそうに笑いながら返事をする、再び仕事に戻っていった。流石に一人で喋っているわけにはいかないものの、喋らないのはそれはそれで悲しいものがある。

右手で肩を揉みながら、左手で携帯のメールを確認。（我ながら器用だ。）

「あ、相原からだ。……動き出した模様、ラブレター入ってた。だつて。」

「ほんまかー、なら友也に電話してみるかな。」

椎名はそう呟くと、携帯を取り出した。

「もしもし友也？動き出したって聞いたけど、ほんま？」

『すみません椎名さん、見失ったみたいなんです！どうしたらええんやろ……』

「落ち着き、慌てても始まらないんだから。」

悔しそうな顔が目に見えてくるようだ。オレは椎名が電話をしている間に出掛ける準備をした。

「ちよつと目を離れた隙に逃げたらしい。丁度良いから今日は泳がせておこうや。海斗が依頼人と一緒に居てくれてるし、心配無いやろ。何もする気はないようだし、明日になれば尻尾も掴めるさ。」

「そつだな。」

「何やってんだよ、お前。」

お昼休み、天気良かったので外を散歩していると（うちの学校は中々広い）、木の陰に隠れた藤宮を見つけた。

（仮面持つて来てないけど、いつか。）

「ひっ！」

綺麗なくらい漫画リアクション。そんなに不意打ちだったか？（つか怖かった？）

藤宮の視線の先は、友達と談笑する依頼人。

「何してたんだ？こんなとこに隠れてこそこそ。」

「ふ、風紀でも無いくせによく言うよ。何してたっていいだろ？」
恐怖心でいつぱいなのに反抗してくる。声もろ震えてどもってるのに。

「生徒会は学校の秩序を守るのも仕事だ。場合によっては……」

オレかつこいい！ちよつと生徒会面してこんなこと言ってみたかった。

……ごめんなさい。

「な、何も、」

「してはりましたよ、新垣さん。」

声の主は、息を切らした葛城。右手にはラブレターと思わしき手紙。

「物的証拠ってヤツです。椎名さんと桐山さんが今までの手紙と藤宮の筆跡を照らし合わせてくれました。殆どワープロ入力やったのですが、二枚だけ手書きがあったんですよ。手紙がかなりの量だったので、思ったより時間かかってしまいましたけどね。」

「でかした、葛城。さ、生徒会室まで来てもらおうか。」

「二人に改めて言っておいて下さい、昼飯抜きでやってはりましたから。」

ああ、それは言っておきなきゃな。オレは藤宮を（強制）連行した。

「お疲れ様、二人とも。」

あの後藤宮は諦めたのか、生徒会室に入った瞬間に自白した。こつてりオレが絞っておいたからもう大丈夫だろう。依頼人が嫌がっていたことも言っただし、二度とやらないようにと再三釘を差しておいたし。

「捕まって良かったよ。昼抜きの甲斐はあったよな？」

「せやな。依頼は必ず遂げるのが俺らやもんな。友也もお疲れ。」

「お疲れ様です。」

結奈と相原はまだ来ていない生徒会室で、オレたち4人はお茶をしていた。それなりに体力を使う依頼だったが、それもそれで楽しいか、なんて思っただけ。こんなにもレンジャーに馴染むなんて思いもよらなかった。

……って、結局今回も仮面付けなかったけどな！

「仮面？いいのいいの、レンジャーなんてただのごっこなんだから。」

……リーダーがそれ言ったらオシマイじゃないのか？

「細かいことは気にすんなよー」

「気になるやろ。」

…… ナイスツツコミ。

本当にこの人たちは自由だな、なんて思って頬が緩んだのに、オレは気付かなかった。

「新垣さんニヤニヤせんといて下さい。」

「してないわっ！」

誰がするかっ！！

第5話：生徒会書記と人質の憂鬱（side：niiigaki）

珍しく放課後以外ですれ違った葛城の頬には、傷痕があつた。

「傷？ああ、確かにこないだも絆創膏貼つてた。」

オレは、葛城とよく一緒に居る椎名に聞いてみた。その性格故に誰からも好かれるタイプの葛城が、不自然な（喧嘩の後みたいな）傷を付けて校内を歩き回るだろうか？

「流石に俺も分からないわ、すまん。」

「何かありそうだから、気をつけてやってくれ。」

そう言つと、椎名は微笑んで頷いた。

「あんたに言われるとは思われへんかった。」

「なっ……」

……軽く貶してませんか？

「友也のことは任しとき。」

「ああ。」

椎名なら安心だろう、そう思っていたのに。

「葛城、お前最近可笑しくないか？」

「可笑しくなんかないですよ、新垣さんこそどないしはりました？」

たまたま擦れ違った葛城を引き止め、問い質す^{ただ}。けれど相手は目を見ず。

「その傷は？」

「猫に引つかかれただけです。何でも無いですから。」

頑なに隠す様子で葛城は誤魔化した。違和感あるのに、オレは何も聞き出せなかった。

「急いでいるんで失礼します。」

そうして彼は去っていった。

「ということがあつて。」

「目を見ない？それは引つ掛かるな。探りでも入れますか？」
またまた不敵な笑み。

……出た、生徒会人気会計。人脈も人並みじゃないな！

「そうしてみてくれ。オレは何も出来ないけど。」

「ええよ、友也は俺のパートナーやし。俺が調べてみる。」

「無茶すんな。」

「せえへんよ？」

ふふっ、と笑うと椎名は黒縁眼鏡を掛けた。

THE インテリ！

悪巧みしてそうな、と付けたいくらいだよ。

そうじゃなくて。オレがこんな風にツツコミいれてる間に、電話を繋いでいた。探りの依頼（こっちが依頼してどうするんだか）をしてるみたい。

「よろしく頼む。報酬は望む通りにやるから。……お前ド変態だな、分かったやつてやる。」

そして二言、三言やりとりをすると電話を切った。

「やつてくれるそうだ。」

「頼んだ。」

嫌な予感は拭えなかった。

二日後の夕刻。

遂には椎名まで消えてしまった。一年生のクラスに葛城を迎えに行けば姿は無く、誰一人知らないと言って首を横に振った。そのため二年生のフロアに戻って椎名のクラスまで行けば、クラスメートは皆知らないと言った。

「椎名知らない？」

同じクラスの柊や、情報源の豊富な相原、結奈を通して女の子にも聞くが、全く掴めなかった。

「椎ー！」

この学校は私立なだけあって無駄に広い。下手に動けばニアミスで見つけられない可能性もある。でもオレは探しに回った。

体育館周辺に着いたとき、微かに聞いたことのある声がした。部活で使われる体育館とは別の体育館だから、人が居るはずがないのだが。

「し、」

白い狐。そして葛城、彼を取り囲む生徒数名。

「なんでここに……」

葛城がポツリと言う。隣の主犯者らしき生徒が目を見開いている。

……いつぞやの苛めの依頼と同じパターンか。

「何やってんだ、俺に隠し事して生徒会に似つかわしくない連中とお遊びか。」

……挑発しすぎだよ椎名！

「んだと！？」

予想通りの反応を返す主犯者。その反応が可笑しかったのだろう、

椎名はケラケラと笑った。

「あーあ、面白い。久々だわ、こんな面白いの。葛城、怪我してるなら下がつとけよ。」

そう言い切ると椎名は、こちらを向いて口角を若干上げた。口パクでオレに伝える。

……「来い」って、バレてたか。

言われて常備してある仮面を着けると、オレは椎名の側まで駆け寄った。軽く肩を叩かれ、互いに頷く。

「来い、生徒会嫌いなんだろう？」

「嫌いだよ！あの偉そうな態度がな。」

……オレら偉そうにしてねえぞ？お前らの方がよっぽど偉そうだから！

殴りかかってくるが、オレも椎名も余裕で交わす。それが癢に触ったのか更に怒らせてくる。

「余所見すんな。」

「悪い。」

葛城を気かけながら相手をする椎名の間を、主犯者は狙ってきた。それをオレが止める。

「変な仮面取つたらどうだ？」

「断る。」

不意に隣の気配が止まる。不審に思って振り返ろうとしたら、下に引つ張られた。

「お前も、余所見すんなよ。」

今まで頭のあったところに拳が飛ぶ。礼を言おうと椎名を見ると腹を押さえていた。

「どうした！？」

「ちょっと油断した。大丈夫。」

鳩尾に食らったらしい。オレは立ち上がって殴りかかった。

「いい加減にやめといたら？このくらいに……」

「友也っ！」

……最後まで言わせてくれ頼む。

ってそんな場合ではないらしい。葛城の居る方向を見ると、まあ派手にやられてる。椎名も少し動揺してるみたいだ。互いに互いが人質のようで、下手に逆らえないのか。

なら、オレが。

「余所見してんな阿呆。」

クリーンヒット。流血沙汰は嫌いなので（一応生徒会だし）鳩尾を狙う。暫くした椎名は落ち着いたのか、立ち上がるとオレと共に反撃を始めた。

「葛城、遠慮するな。俺が許してやるから。」

「ほんまですか？なら遠慮なく。」

につこり笑うと、葛城は容赦なく隣の奴を殴った。

……笑顔が椎名と似てるのは気の所為、だよな？

引きつる、味方なのに顔が引きつりそうだよ。

「俺が弱いわけあらへんやろ？人質なんていただけないやんな。」

初めて聞くような低い声に似つかない可愛らしい笑顔で、葛城は脅した。

「やばい……」

主犯者の焦りの声に、内心爆笑。

無事帰ってこれたオレたち。椎名は葛城の手当てをしている。運が

良いのか何なのか、今日は他の人は早くに帰っている。

「なあ葛城。人質って誰のことだ？」

「そついや、言ってたような。」

オレの問いに、葛城は苦笑する。言い難いことらしい。

……とはいえ、オレは分かっているけどな！アイツが守りたい人なんてあの人に決まってる。

「椎名さんですよ。」

「何で俺？」

……鈍感椎名め。

「一緒に居るからとちやいますか？」

「でも俺は人質になれへんぞ。」

「それでも、椎名さんが怪我したらって怖かったんですよ。」

んーそっか、なんて答えて葛城の頭を撫でる。絶対分かってないだろうけど。

「ありがと、友也。」

「いえ、こちらこそありがとございます。椎名さんが来てくれたから……」

……精々二人でいちゃこらしてるんだな！嫉妬？嫉妬なんかしてないぞ！

「新垣さん、ありがとございます。助けに来てくれて。あと椎名さん守ってくれて。」

少しだけ照れた。

第6話：ようこそ、我が同朋よ（side：nigaki）

いつものように生徒会室でのんびり過ごす放課後。そのときドアがノックされ、入ってきたのは校長だった。

「校長！？どうしたんですか？」

生徒会会長である柊が問いかける。何か不味いことでもしたのだろうか。

「そんな不安そうな顔をするな。ただ、今度転校生が来るということとを伝えにきただけだよ。」

校長は紳士的な人で、見た目は優しいダンディーなおじさんだ。

「「転校生！？」」

「で、俺らでおもてなしでもするんですか？」

相原が穏やかに言う。

「ざっくり言うとそのうことだね。」

「ざっくりすぎやろ……」

椎名がボソツと呟く。激しく同意。

「歓迎会でも開いてくれ。ああそう、因みにクラスは桐山さんと椎名くんと同じだから。」

「まさかの。」

ちよつと凹み気味の柊が言う。「どんな子なんやろ」と結奈と話すのは無論、椎名。

「じゃあどんな歓迎会やろうか。」

相原は相変わらずおっとりして言った。それに葛城が答えた。

「やっぱり歓迎会といえば、どこかに行ってバイキングとかでしょう。」

……っってお前、学年違うだろ！

そんなこと誰も気にせずに続ける。

「それもええやんな。まあ食べ物じゃなくても良いと思うけど。」

「某・ズニーランドとか？」

良い！と結奈が反応する。好きだからな、結奈。

……でも高くねえ？（手で金マーク作って）

「やっぱり高いし、ちょっと遠いかもな。」

「一人のための歓迎会でそこまでやる必要無いしね。」

柊と相原がうんうん、と頷きながら言った。

「じゃあ、やっぱりこの部屋でお菓子でも食べるか？」

「結局？いつもと変わらないじゃん。」

俺は椎名の笑いながらの問いに答えた。そうかもな、という椎名の返事。

「でもそれが私たちらしくて良いのかもね。」

結奈も満足げに肯く。

「じゃあそうしよう。装飾もして。」

柊が言うつと、皆頷いた。

転校生が来る当日。柊に「転校生に来るように呼んだから、装飾頼む」と言われ、オレや他の人は生徒会室に来ている。

「こつちにそれ置いて。」

「これはー？」

様々な声が飛ぶ。良くあるちゃん紙の輪っかとか、風船とか、そんなものを飾っていく。

嫌いじゃないけどね、こつという作業。

「桜ちゃん、来るのかな？」

「来るだろう。」

転校生は永井桜という名前らしい。見た目はそこそこ可愛い女の子

みたいだ。椎名によると、ちょっと警戒心が強くてあんまり喋れ無かっただと。

……お前も十分警戒心強いけどなー

「じゃあ、今日は楽しめますか。」

「ほな、放課後。」

ざっと装飾してしまうとお昼終了のチャイムが鳴ったので、オレたちは解散した。

コンコン。

扉が重い音で鳴る。きっと今回のお客様だろう。柊が「どうぞ入って」と言つのと同時に、椎名が扉を開ける。どうぞ、と執事のような(?)仕草で彼女を部屋に入れさせた。

「えっと、お願いします。」

消え入りそうな声で挨拶をし、ぺこりと頭を下げる。結奈がニコッと笑ってそれに応えた。

「堅くならないでいいよ！宜しくね」

その笑顔に釣られたか、桜ちゃんもぎこちなく笑った。

「ささ、とりあえず挨拶しちゃう。俺は桐山柊、生徒会会長ね。」

「相原海斗です。生徒会副会長なの。」

「椎名棕や、生徒会会計やってる。」

「葛城友也です、高一で生徒会書記です！」

「中本結奈、仲良くしてねー」

「新垣隼、宜しく。」

それぞれのキャラとテンションで挨拶し終わると、その迫力に気後れしながら桜ちゃんも挨拶する。

「永井桜です。」

「よし、桜ちゃん楽しんで帰ってな。皆お菓子出せお菓子！」

……お前はやらんのか柊！

という不満なんて口にせず（というか楽しいから）皆それぞれ机にお菓子を出す。トランプやら王道な王様ゲームのための割り箸なども。お菓子も、高いものからコンビニのお菓子まで様々だ。

「好きなもん食べ？」

ブレない笑顔で椎名が桜ちゃんに語りかける。彼女はおずおずと頷いた。

「おい椎、桜ちゃん物怖じしてんだろ」

「ん？ごめんごめん、俺怪しい者じゃないし。」

椎名の得意技、おちゃらけて濁す。でもそのお陰か、ほんの少しだけ桜ちゃんは笑ってくれた。

葛城が突然椎名に駆け寄る。

「クッキー作ってきたんで、食べて下さい！あ、皆もどうぞ。」

……お前は女子か！オレらはついぞか！

「ありがとう。」

「俺も作ってきたんだぜ？」

柊もタッパーを取り出して配る。結奈は周りに花を飛ばしながら、桜ちゃんに言った。

「柊くんの作るお菓子、凄く美味しいんだよ！」

「本当？ありがとうございます。」

彼女はそう言うと、一口パクツと食べたなら目を丸くした。「美味しい！」という声が心なしか弾んでいる。

「それは良かった。」

そういう柊も嬉しそうに口元を綻ばせている。そんな彼が持つタッパーからお菓子を幾つも持っていく男が。

「相原。」

「ふわぁいつ！」

口に詰め込みながらの返事。

……お前何してんだ、いつもの貴公子面はどうしたよ。

「ズルい！私もー」

結奈が負けじと食べる。

……お前ら、メインが食べないでどうするよ。

「「いいの。」」

……いや、良くない。

その後も下校時刻ギリギリ（１８時）までワイワイ騒いだ。

ランプではオレと椎名が負けて十八番を歌わされたり。王様ゲームも柊が物真似したり、結奈がパシリになったり。

「楽しかったなー。」

柊の声に葛城が応える。

「ほんまですわ。」

「装飾の片付けは明日でいつか。」

「もう時間だもんな、じゃあ解散！」

柊の一声でオレたちはそれぞれ帰路につく。オレと結奈と桜ちゃんと相原は同じ方向で一緒に、柊は一人で、椎名と葛城は二人で帰った。

「楽しかった、桜ちゃん？」

「うん、楽しかった。」

始めよりも大分砕けた調子になった彼女は、楽しそうにしていた。

「それは良かった。あんな変なキャラの奴らだけど、仲良くしてやってね。」

「隼だって最近生徒会に入って来たばかりじゃん。」

結奈のツツコミに、思わずたじろぐ。何だかずっと一緒に居る氣でいた。

「これから宜しくね。」

そう言った桜ちゃんの笑顔は、はっとするような表情だった。

番外編：転校生のモノクロなモノローグ

私は、あの笑顔が嫌いだと思った。

初めてあの人と出会ったとき、あの人は凄く輝かしく見えた。誰からも好かれ、そして尊敬されている、そんな風に見えた。

しかし「椎名くん。」女の子たちが甘い声でその名を呼ぶことに吐き気もした。下心丸見えのその声を、あの人は笑って流した。

正直凄いと思うのと同時に、怖いと思った。嫌いだった。

皆に同じように返す笑顔。寸分の狂いもない、造られた微笑み。何を考えているか分からないような胡散臭い笑み。そして、不自然なくらい紳士的な優しさが。ポーカーフエイスはいつも上手くて。

女の子たちはいつも熱っぽい視線を送り、目立とうとしてきた。けれどあの余裕の笑みで制してしまう。優しいけど、とても冷酷な人。

もしかしてアンドロイドじゃないかと疑ったときもあった。私はその嘘臭い優しさには騙されないぞと思った。だけど、出来なかった。

傍に居るようになればなるだけ、自分が惹かれていくのが分かった。それに、離れれば心配掛けて、輪をかけて優しくなる。こんなの板挟み状態だ。

軽く逃げ道を作れば、またそんな綺麗な悲しそうな顔。それでも私はこっちの人が好きというフリをした。そうじゃないと、心がもたなかったから。

私は新垣くん相談をしていた。そして逃げ道になってもらっていた。そうするとね、あの人は表面上悲しそうにするし、嫉妬もしてくる。そんなことしたら自惚れるだけなのに。

私はちよつとだけ、愛されてるのかなと思った。本当は告白する勇氣も、傍に居る勇氣も無かったのだけれど。

そのうち段々辛くなつていった。学校で目が合つて微笑まれると、胸が押し潰されたような。苦しくなつて逃げ出したくなる。

「心臓が痛いんです。」とこの気持ちを偽つて無視して保健室へ逃げた。何も救われなかったけど、意味も無くそこにいた。

一度だけ私は、「優しくすぎて嫌いだ」と言った。「そっか。」その孤独な呟きは、哀愁を纏つて私たちの間に落ちた。その後の「ごめん」が、何故だか私を苦しめた。

私にはこの気持ちに蓋をするしか、残された道は無かった。

ある日、あの人は気付けば教室に居なかった。私は氣になつたから、保健室に行くフリをして生徒会室に寄つてみた。そこに居るといふのは確信に近い予感だけど。

ドアをそつと開けると、確信した通りに居た。でも空氣が違つた。いつも纏う冷静で余裕があつて大人な空氣じゃない、ある意味取り乱したような。

あの人は私に気付かずにカレンダーを見ていた。一心不乱に、食い入るように見つめていた。「。」「ぼそりと呟かれた声はこちらまで届かずに消える。だけどその声は丁度、恋人を呼ぶような甘さを含んでいた。

盗み見た横顔に、一筋の涙が伝つたのがはつきりと見えた。不謹慎だけど、美しいと思つた。はらはらと垂れた黒髪が横顔を隠してしまふ。私はもつとその姿を見たくて近寄つた。

「。」「再び呟かれた声。それは名前で。知らない人だけれど、やはり味わうように呟かれていた。

「椎名くん。」そう呼べば、はつと顔を上げる。氣まずそうに笑つてから涙を拭く。

人前では強がる彼が、今は儂く見えて抱き締めた。人間らしいところだつてあるんだと、私は酷く安心していた。

「ありがとう。」と言われたのと同時に強く抱き締められた。「もう少しだけ、」余裕なんかないですとでも言いたげな口調に、もどかしさを覚えた。

その時告白していたら、何か変わっただろうか。私の人生はおろか、あの人の人生まで変えてしまっていたかもしれない。それならばどちらの方が良かった、なんて今更言えたことじゃない。

けどあの人も私も、交わらない道を選んでしまった。だからもう良いんだ。

でもやっぱりそんな優しい声で、私の名前を呼ばないで。もっと好きになつて、また自分を抑えられなくなつたら今度はそうは出来ないから。

あの日はある人の命日なのだと聞いた。二年前に事故死で亡くなつたらしい。

「大切な人を守つたんだつて。俺の大好きな人だからさ、俺も分かるんだ、あの人の気持ち。俺も大切な人守るために身を投げ出しそうだしね。」そうあの人は笑つて言っていた。傷付いていたのは、あの人の方だったのか。

「懂れてたの、死に方までね。」目を伏せたあの人の腕を必死で掴んだ。今にもその人に、天国あっちだけに連れていかれそうで。

「貴方はそんなことしないでいい。きつと、守られた方も辛いから」「そんなことされたら、私なら幻想でしか生きられなくなる。あの人の居る幻想でしか。」

「それは分かつてるよ、その人の大切な人とも友達だから。でもきつとね、身体が勝手に動く。」そう言つてあの人は優しい手つきで私の頭を撫でた。その手の温もりが、生きているんだと思わせた。

私は暫くして、桐山くんに「思わせぶりが辛いのだ」と言った。あの日の事は言わなかったが、桐山くんもあの人に似た手つきで頭を撫でた。

「そうだね。きっとあいつはそれで自分と君を守ってるんだ。」優しい口調だった。私には分からなかった。あの人自身はまだしも、どうして私までも守るのか。

「自ずと分かってくるよ、あいつと一緒に居れば。って言って、知ってるの俺だけなんだけど。」くすくすと笑った桐山くんは、頑張ってと口にした。

何度嫌いになろうとしても、頭から離れない。でも偽善的な笑顔を浮かべるあの人のことなんて、大嫌いだ。

第7話：たまには自分のことだつて（side：nii gaki）

「ばかだよなー、全くさ……」

結奈が呆れたように言う。柊の表情はなんとも言えない。

「柊くんったら、生徒会長のくせに明日の試験勉強してないの！」

「言うな、だつて忙しかつ……」

「言い訳無用」

こんなときばかり、結奈はちよつときつくなる。勿論ふざけてな
んだけど。

桜ちゃんもあれから一緒にいるようになって、ますます賑やかにな
つたものの。

「わ、私もやってないんだ、教えてくれる？」

この時期厄介そうなのがが増えてしまった。かという俺もやってない。

…… やってないのかよ！

というどこからか聞こえるツツコミに一人で凹みつつ、俺は未だ言
葉を発していない二名（相原はいいの、どうせ寝てるから）を見た。

「さい、ですか」

すっかり忘れていたのだが、椎名と葛城は頭が良いのだった。俺も
バカじゃないけど。

「もー、ほら邪魔しないの。しーくんは学年トップなんだから」
「数学苦手だけどね」

さり気なく柊が毒舌を吐く。凹んだふりの椎名に、葛城が「教えま
すから！」と叫んでいる。

なかなかシユールな光景だ。

「じゃあさ、椎が教えてくれよ」

「何を教えるん。英語？」

「イエス」

俺は英語苦手だし……。

「なら桜ちゃんであえやん」

「えっ私？」

「だって得意でしょ。俺苦手やから」

……嘘つけ！

「嘘つけ！帰国子女だろ？」

柊と同時に（心の中で）叫ぶ。まあ、流石に帰国子女ではないらしいが、発音がネイティブなのだ。

「ちゃうわ！帰国子女でこんなに関西弁使つか？」

柊はそう言った椎名にどつかれてしまった。

「じゃあ、現社教えて下さい」

まだ椎名にはかたい桜ちゃんが言う。それに微笑んだ椎名は「勿論いいよ」と頷いた。

「俺らもいいの？」

柊が身を乗り出す。そういえば、前回相当悪かったとか。

「しゃーないなあ、教えるよ」

何だかんだ彼は甘いのだ、ここのみんなに。

「だからね、経済成長率を出すには、これを……」

……先生、説明は分かるのですが問題解けません分かりません。

置いてけぼりの俺を余所に、椎名はどんどん進めて。

「えーっと、こう？」

「ちゃう、こつち。で、名目を実質にするからこの式で……」

数学が苦手な桜ちゃんは苦戦しているようだ。

俺は理数なのに苦戦してるけどな！

「椎わかんね」

「は？こうだよ、こう。あとはフツーに計算」

俺にはかなり投げやりだけど、それはツンツンなんだよな！

「じゃあ、こうでいいんだ。できた！」

桜ちゃんが嬉しそうに声を上げると、椎名は彼女の頭を撫でた。その瞬間桜ちゃんは固まる。

それを見た柊は苦笑いだ。

「あれ、そういえば今日は葛城は？」

不意に柊がそう言う。確かにいない、珍しい。

「ああ、あいつも教室で同じようにしてる」

ごく普通に答えたんだろうけど、違和感が。

……あ、そっか。「くんじゃない？」じゃなくて断定だからか。って、

「なんで分かんの、ってかそれ女子かもしれないじゃん」
からかって言えば、椎名は笑った。

「ナイナイ。友也に限ってないでしょ。女友達程度だよ」
そういう奴。

何でも知ってるかのように言う。パートナーだからな、羨ましい。
でも俺も結奈のこと知ってる、幼なじみだからな！

……じゃなくて、あいつちよっと慌てるかと思ったのに。
からかい損とはこのことが。

「しーくん！」

ボタンと勢いよく入ってきたのは結奈。右手に青い教科書を持っている。

「先生捕まえられなかったから教えてよ！」

抱きつきながら教科書を見せている結奈に、それを見て眉をひそめる桜ちゃん。前から結奈は椎名にああだけど、桜ちゃんにとっては恋敵ってところか。

それをなんとも思わず、引き剥がすわけでもなくそのままにいる椎名も椎名だ。

「今日のところやる？」

「へ？なんで分かったの？」

「だってさ、今日言ってたやんか。分かんないーって」

「聞いてたんだあ」

何だか嬉しそうにする結奈を見ていた桜ちゃんは、眉を下げた。嫉妬ではなく寂しさからか。

誰か、KYな二人をつまみ出してくれー！

そんな俺の願いも、誰にも（帰り支度中の一人にすら）届かないようだ。無情な世の中め。

仕方ないので俺のところに來させる。

「桜ちゃん」

「新垣くん、どうしたの？」

「俺らも帰ろつか」

その言葉に、少し戸惑う。

「結奈ちゃんは？」

「置いてく」

もうそれなりに時間は過ぎている。早く帰ろうと鞆にノートやらを詰め込む。

「ちよっと待ってあげたってや、隼。すぐ終わる」

椎名はそう言っで、急ぎめで説明した。

「なるほど、ありがとう。しーくんわかりやすい！」

「どういたしましてー」

ほわほわしながら、椎名も帰る素振りをみせた。そんな中一人先に帰ろうとしていた柊が、俺の隣にいた桜ちゃんの頭を撫でる。ハッとして振り向いた彼女の視線を追えば椎名がいた。

結奈に飴を渡している。その手には、あと二つ。

「ん、隼」

俺には投げてよすが、桜ちゃんにはちゃんと渡す。

……女の子に優しくするところが無性に腹立つ！俺には出来ないからだけ。

好きな子にはツンツンな新垣です、はい。

「あ、ありがとう」

顔を赤くした彼女が何だか可愛らしく見えた。

「椎は一人？」

「いや、友也と帰る」

そっか。忘れていた。葛城過保護だしなあ。

「気をつけてな」

明日、と手を振るので、俺たちも手を振る。去り際に見た椎名の横顔は見覚えがあった。

『俺ってそんな強くないの』とあの人が遺したというシンプルな髪留めを握って涙を堪えていた、あの日の彼だった。

暫く歩いて、さっき引つかかったことを聞いてみる。

「桜ちゃん、柊がさっき頭撫でたときに何ですぐ椎のこと見たの？」

言いにくそうな、困った表情を見せたので、俺は深く追及しないこ

とにした。

「言えないならいいよ、気になっただけだし」

「ごめんね」

申し訳なさそうにするから、思わず手が伸びた。だけど椎名や柊み
たいに出来なかった。

……ああ、そっか。何となく気付いて、少し悲しくなった。

「あれ、今日椎は？」

昼休みはみんな食べている俺たちだが、一人分席が空いているの
に気付く。

「ああ、棕ちゃんなら病院」

「え、どっか悪かったっけ？」

確かに病弱っぽいが、実際は結構タフだ。それも偽りだったのだろ
うか。

「違う、棕ちゃんは元気だよ」

あからさまにはぐらかす。他の人は知らないだろうし（何気にクラ
スメート歴長い俺すら知らない）、葛城は……やけに静かだ。いつ
もはおちゃらけているのだが。

「葛城、大丈夫か？」

「っ、はい」

椎名がいらないからなのだろうか。やはり元気がない。

……全く、どれだけ椎名に懐いているんだ。っていう状況でもなさ
そうな。

「本当に大丈夫か？」

「はい、大丈夫です。あの、俺行きますね。早退するんで」

葛城は慌てたように立ち上がった。そこに柊が声をかける。

「後で行くって伝えてくれ」

こくと頷いて彼は去った。

「今日、変だな」

無理に触れるものでもないし、触れる気もない。

そこまでバカじゃないしな。

だけど、このような空気は嫌いだった。

「ほら、早く食べちゃおうぜ!」

そしたらみんなで遊ぼう。わざとらしい俺の言葉は虚しく響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7082r/>

Stare Melody

2011年11月26日15時49分発行